

「私のお客さん」と築く親密性

—フィリピン、M市のカラオケパブの事例から

田川夢乃*

<要旨>

本論は、フィリピン、マニラ首都圏 M 市の日系カラオケパブ (JKTV) の事例から、金銭を介した交換関係における親密性を検討することを目的とする。ここでは、売買春、セックスワークといった対人接客的性サービス業における「商品」をめぐる議論に基づき、JKTV における「サービス提供者」としてのフィリピン人女性と「顧客」としての日本人男性の関係性において金銭と引き換えに提供される「モノ」とは何かを考察する。

売買春は、お金を用いた交換と社会関係に関して、最も議論されてきたもののひとつであろう。売買春をめぐるのは、そこで取引されている商品が、売春者の身体や人格の一部であるのか(「性の商品化」)、性的なサービスであるのか(「セックスワーク」)が問題とされてきた。本論は、顧客男性の射精を促すサービスを含まない、売買春のグレーゾーンに位置づけられる JKTV を対象とし、ここでの「商品」を売春者と買春者の間に形成されるモノとして検討する。

JKTV は、生活の文脈を共有しないフィリピン人女性と日本人男性が「サービス提供者」と「顧客」として出会うコンタクトゾーンとして想定される。そこでは、性的関心を含む好意を持った相手との「疑似恋愛」の相互的な働きかけのプロセスが、両者の間に<選択的コミットメント>に基づく文脈限定的な親密性を形成していた。JKTV において顧客によって支払われる金銭は、共通性も共有性も持たない両者の関係性の文脈を代替し、「サービス提供者」との間に親密な関係性を形成しうる「顧客」としての「役割」をもたらしていると考えられる。

キーワード：性産業、売買春、賃金労働、親密性、フィリピン

*TAGAWA Yumeno 広島大学 d160224@hiroshima-cu.ac.jp

1 はじめに

賃金労働は、国や地域、民族を超えて、人びとの生活の一部となっている。賃金労働をめぐっては学術領域を問わず、幅広く議論されてきた。主流派経済学は自由主義思想に基づき、労働をあらゆる富の源泉とする市場経済主導の見方を提唱してきた。これに対し、一部の社会学では、お金を交換の手段として用いることに対し、社会的紐帯の破壊を危惧する見方が広く共有されてきた [ジンメル 1999]。また、個人主義化の徹底が社会的紐帯を喪失させ、新たな格差を生み出すことも指摘されている [カステル 2012]。

1980 年代以降、人類学や社会学において、そうした「お金の決定論」に対する批判として実証的研究が行われるようになり、そこではむしろ交換を行う社会関係によってお金の意味が決定されることが指摘された [Bloch and Parry 1989; Zelizer 1989]。Viviana A. Zelizer は、何らかの親密な関係性のなかで行われるケアの関係性は、お金のやり取りを伴うものであったとしても単なる売買とはみなされず、個々の関係のなかで交渉されるべき取引として成立していることを示している [Zelizer 2005]。

本論は、これらの議論を踏まえ、賃金労働と親密性、あるいは金銭を媒介とする交換と親密性について検討する。このため、対人接客業、いわゆるサービス業に注目し、なかでも金銭と交換される「モノ」について議論されてきた売買春、セックスワークの事例を扱う。性的な行為が行われる現場におけるサービス提供者と顧客の関係性に注目し、そこにおいて金銭と引き換えに提供されている「モノ」とは何かを考察する¹。

本論ではフィリピン、マニラ首都圏 M 市の日系カラオケパブ (Japanese Karaoke TV: 以下 JKTV)² におけるサービス提供者のフィリピン人女性と顧客の日本人男性の関係性に焦点を当てる。JKTV は日本のキャバレーやナイトパブを模したナイトクラブで、顧客の大半は日本人男性が占めている。また、フィリピンのビジネス首都とされる M 市の JKTV の顧客は、観光客が多い他地域のものとは異なり、駐在員や現地での自営業者など中長期滞在者が多い。ここではそのような JKTV を、多様な差異を含む者が「サービス提供者」と「顧客」という役割のもとに出会うコンタクトゾーンとして捉え、お金を媒介とする親密性がいかにして形成されているのかを明らかにしようと試みる³。

1 ここでの「モノ」とは物質的なモノのみを指すのではなく、時間、空間、関係性、サービスといった非物質的な要素を含む「何か」を検討する。

2 ここでは Japanese Karaoke TV を便宜上「日系カラオケパブ」と訳したが、これには以下の 2 点の理由がある。第一に、日本にある「フィリピンパブ」との関連性を表すために、「パブ」という語を使用した。第二に、「日系」というのは「日本人経営の」を指している。フィリピンには、大きく分けて、日本人経営、韓国人経営、フィリピン人経営の 3 つの KTV がある。このうち、フィリピン人経営の KTV はローカル向けのカラオケもできる接待飲食業であるが、日本人経営のものとは多少形態が異なっている。韓国人経営のものは完全個室で、店内での性行為があらかじめ意図されているため、調査対象の女性従業員 (Customer Care Assistant: 以下 CCA) や日本人顧客においても日本人経営の KTV とは大きく異なるものとして捉えられていた。

3 筆者は 2017 年 10 月から 2018 年 2 月、4 月から 6 月の約 9 ヶ月間 M 市にある JKTV のひとつ X 店にサービス提供者として在籍しつつ参与観察を行った。本論におけるデータは、同期間中における観察と同僚のフィリピン人女性たちとの勤務時間内外の日常会話に基づいている。

2 金銭を媒介とする相互交渉と親密性

本章では売買春、セックスワークをめぐる議論を、ここで金銭と交換される「商品」とは何であるのかという観点から整理する。第一節では売春否定派の見方を、「性の商品化」に関する批判を中心にみていく。次節では、売春肯定派が主張する自己決定権の行使による「仕事」としてのセックスワークという見方を検討する。

2-1 性の商品化

1981年1月、フィリピンではアジアキリスト教司祭会議連合、人権団体、フェミニスト団体等の連名によって、当時の日本の首相・鈴木善幸に対し日本人男性観光客による買春ツアーに抗議する意見書が提出された。読売新聞1981年1月5日付けで掲載された「買春 比、怒りの直訴状」という記事によれば、この意見書では日本人男性たちの過剰なまでに性行為に特化した振る舞いに対し、「拝啓、日本の鈴木善幸首相殿。あなたの東南アジア諸国連合（ASEAN）友好訪問は、集団買春旅行でアジアを侵略、わが国の女性たちを辱める日本人男性観光客によって凌辱されようとしています。日本人は、この醜悪な行為がいまだにうずく第二次世界大戦の古傷を拒絶しようとする努力を全く台無しにしていることに気がつかないのでしょうか」と批判がなされた。

ここにおけるフィリピンの人びとの怒りは、ひとつには、そうした買春ツアーは経済格差のもとに途上国の女性たちを性的に搾取し、彼女たちの尊厳を踏みにじってきたことが要因として挙げられる。またそれと同時に、娘や妹たちを商品化され代替可能なモノとして欲望のままに消費されたことが指摘された。

このような批判は、売買春をめぐる「性の商品化」として議論されてきた。性の商品化とは、セックスやそれに関連する性的行為が商品として売買の対象とされることを指す。それは大きく分けて、①避妊具や媚薬などの性的行為に役立つ物材の商品化、②セックスワークなどの性的行為あるいはその他の性的欲望や性幻想などを満足させるサービスの商品化、③ポルノグラフィーなどの性的行為に関連する情報の商品化の三つに分類される[江原 2008]。

性の商品化の問題は、男性による支配が前提とされており、「買う側」としての男性と「売る側」としての女性というジェンダー間の不均衡が認められることにある。またそれは同時に、「商品」としての女性の価値が、「買う側」の男性たちの評価によって決定されるということを意味する。これには「女性」としてある身体に対し男性が一方的な評価を行うこと、男性が持つ評価に女性が自ら積極的に追従するようになること、そうしなければ男性優位の社会において女性は不当な扱いを受ける恐れがあることが含まれる。つまり、「商品」としての女性とは、女性の生きた身体を、男性たちのまなざしによって記号化しモノ化すると同時に、女性たち自らがそのまなざしに従属するという双方向的なプロセスによって生産されているものであるということだ⁴。

江原由美子[2008]によれば、売買春はこうした性の商品化の最たるものとして以下の2点において批判されている。第一の批判は、売買春が婚姻制度外の性的行為であること

に所以する。ここでは、経済的関係や情緒的関係の基盤を形成する婚姻制度において重要な意味を持つものとして性的行為を位置づけている。婚姻制度において、性的行為は情緒的な繋がりを形成あるいは強固にし、家計の共有を根拠づける。これに対し、売買春はそれらの情緒的関係、経済的連帯を金銭の授受によって代替することで一時的に成立する性的関係性であるとされる。この視点に立つ場合、売春者は本来情緒的関係性を生み、またそうした関係性のもとでなされるべき性的行為を、そのような親密性から切り離し金銭と引き換えに買春者に明け渡していると考えられる。

第二の批判は、「性」を「人格」の中心に位置づける見方から、売買春は売春者（主に女性）の人権を侵害していると指摘する。性的行為は私的領域の最たるものであり、個人の性を人格から切り離して考えることは出来ない。そのため、売買春は売春者の人格を売り買いすることになる。このことは、他者の性＝人格を自己の性的欲望の充足のために道具的に利用することと考えられ、売春者に対する搾取として批判される。また、人格の一部を金銭と引き換えに他者に利用させることは、売春者の心身に少なからぬ影響を与えることも懸念されている。

2-2 サービスとして提供されるセックス

「性の商品化」に基づく売買春への批判においては、いくら売春者自身が自らの商品化に加担していようと、彼女たちは皆、買春者による性的暴力、搾取の被害者として位置づけられた。

確かに、上記の買春ツアーの例では、その大多数がフィリピン女性たちをモノ化し搾取する「性の商品化」であつただろうことは否定できない。ここでは「異国の女性の身体」に価値が付与され、彼女たち個々の特徴は付属品に過ぎなかった。しかしながら、このことからすなわちフィリピンの外国人向け性産業に従事する人びとは皆「従属化され、搾取や差別を受ける人びと」だとすることもまた、彼女らを「匿名化された被害者」の総体として客体化してしまうことにならないだろうか。

売春者への「犠牲者」としてのまなざしに対するこのような懐疑は、売春に従事する当事者団体を含む売春肯定派からも発せられている。これらの人びとは、売春全体を「犠牲」や「搾取」としてみることは、自らの意思によって売春を行っている当事者の主体性を隠蔽してしまうと指摘する。その上で、自由意志による売春を「金銭と引き換えにセックスを含む性的サービスを提供する職業＝セックスワーク」とし、強制連行や人身売買による性労働の強要といった犯罪行為から区別すべきだと声を挙げた。

「セックスワーク」とは、セックスワーカーの権利活動家にして芸術家で作家のキャロル・リーが、1978年に Women Against Violence in Pornography and Media（ポルノとメディ

4 ここでは、男性たちの価値基準において「商品に値しない」と評価された女性であっても、彼女は商品化を免れていないことを指摘しておきたい。彼女はある種「価値の低い商品」としてまなざされている。「女性」という商品は、女性が男性のまなざしに従属しようと抗おうと否応なしに再帰的に生産される。

アにおける暴力に反対する女性たち」という団体がサンフランシスコで主催した会議において使用して以来、主に売春肯定派によって用いられてきた言葉である [Leigh 2002]⁵。キャロル・リーは、当事者を排除しつつ行われる議論において、売春者はモノとして見られ、単に利用するものといわれ、主体性を剥奪されているさまを目の当たりにしたという。「セックスワーク」という語は、売買春を「性を利用する産業」とする見方に対し、買春者は「性的サービス」を利用しているのであり、売春者はそのサービスを提供しているにすぎないことを示すために提案されたのであった [Leigh 2002]。

このように、セックスワーカーの権利運動においては、売春を賃金労働のひとつとし、売春者を自由意志のもとにそれに従事する労働者として位置づけることで、彼女らに主体性を付与するとともに、セックスワークにおける商品を、彼女らによって提供される「性的サービス」としている。それは売春を他の労働から区別し、特別視することに対する異議申し立てを含んでいる⁶。

また同時に、性を人格の中心に据える見方への批判も行われてきた。何故ならば、「性＝人格」論を認めてしまえば、自由意志によってセックスワークを行う人びとは「人格を侵害されることを受け入れた」ことになってしまうからだ。これにより、たとえセックスワーカーが暴力の被害を受けたとしても、「金と引きかえにいったん自分の人権侵害をうけ入れた女は、どんな目にあっても文句をいえる立場にない、という見方」[上野 1994]をされてしまうことになる。セックスワークにおける商品を「性的サービス」とすることは、例えばマッサージ師やケアワーカーが顧客と直接的に接触し非物質的な「サービス」という商品を提供しているのと同様であり、セックスワーカーに限り自らの身体や人格を取引していると考えるべきではない。

2-3 「官能労働」と相互行為性

以上のように、売買春、セックスワークにおいて何が「商品」となっているのかについては、売春否定派と肯定派・当事者団体との間で大きく意見が異なっていた。売春における「商品」を女性の身体や人格に関わる性そのものであるとする「性の商品化」の見方に対し本論は批判的立場をとるが、他方、「性的サービス」であるという当事者団体の主張に手放しに賛同することにも慎重にならざるを得ない。というのも、フィリピンにおける「カーサ（置屋）」や「ゴーゴバー」、日本の「ちゃんの間」のような、あらかじめ女性器へのペニスの挿入が想定されているきわめてストレートな売春以外は、「何がサービスに含まれるのか」が曖昧で、女性と顧客との交渉が重要であるからだ⁷。

例えば、田中雅一は「仕事」としてのセックスワークの労働の内容を、肉体、感情、官

5 セックスワーカーの権利運動自体は、キャロル・リーが「セックスワーク」という言葉を発案する以前、1970年代初頭から始まっていたが、そこでは主に売春を「犯罪」とすることと警察の売春者に対する暴力に対する抗議がなされた [グラント 2015: 34-35]。

6 マルクスに従えば、全ての賃金労働者は自らの労働力を資本家に差し出すことで賃金を得ているのであり、セックスワーカー（あるいは売春者）のみを特別視し批判することは不当であろう。

7 この点は以下の考察において重要な点となる。

能⁸の三つの労働から分析しているが[田中 2014]、そこで扱われる日本のセックスワーカーの事例からは、そうした曖昧性が女性たちに与えるジレンマが見て取れよう。

しばしばセックスワークは「顧客である男性に射精を促す肉体労働」として捉えられてきた。しかし実際のセックスワークには、顧客が求める「純粋な感情表現」[ホックシールド 2000: 147]を官能表現と感情表現でもって提供する技能が求められる[田中 2014: 55]。つまり、ここでは「性的欲望の充足ではなく、社会関係が演技（ふり）で固められている状況で、「純粋な」感情・官能表現に接すること——文字通り裸のつきあい——」[田中 2014: 55]が「癒し」というサービスとして求められているのである。

肉体労働、感情労働、官能労働、そして「癒し」というサービスが独立することなく複雑に絡み合うことで、セックスワークにおける「サービス」は成り立っている。ただし、これらのサービスはあらかじめ「何をすればよいか」が決定されているのではなく、顧客との対面的空間において、相手が何を求めているのかを、自分の出来ること、体調、顧客との信頼関係など、複数の条件と照らし合わせながら考慮し、状況依存的に提供されるものである。

それでは、買春における「商品」とはなんであるのだろうか。

ここでは「官能労働」という側面に注目したい。官能労働はサービス提供者が顧客（あるいは他者）の働きかけによって快楽を感じること、あるいはその反応を示すことを指す[田中 2014: 36]。売買春の現場において、サービス提供者と顧客との間では、互いに働きかけると同時に働きかけられるという主格逆転が絶えず起こり得る関係性が生じていることが考えられる⁹。こうした官能労働に関する相互行為性を売買春の特徴として捉えようと、売買春とはサービス提供者と顧客が共同で作り上げるものであると考えることも出来るだろう。

以上のことから、本論では売買春の現場におけるサービス提供者と顧客間の相互行為性に注目し、売買春において金銭と交換されているモノとは何かを検討していく。

3 フィリピンにおける外国人向け性風俗産業とJKTV

3-1 フィリピンにおける外国人向け性産業とJKTV

実際に事例について詳しく見ていく前に、フィリピンにおけるJKTVの曖昧な立ち位置について説明しておこう。

フィリピンはアジアにおいて最も魅力的なセックス観光地のひとつと言われているが、そうした下地は1970年代から1980年代のマルコス政権期における積極的な観光開発に

8 官能労働とは、「女性が快楽を感じる（あるいはそういったふりをする）行為で、感情労働と異なりセックスワークに特有の労働と考えることができる。女性が男性の働きかけによって「感じている」反応——喘ぎ声やオーガズム——を示すのも、セックスワークでは期待されているサービスである」[田中 2014: 36]。

9 こうした「能動する主体と受動する客体との絶え間ない逆転が含まれる関係性」[田中 2018: 49]については、田中による「誘惑」の議論を参照した[田中 2018]。

よって整えられた。外国人を対象とする性産業には、ナイトクラブ、ゴーゴバー、マッサージパーラー、置屋、KTV、街娼、エスコートガールなどがあげられる。ポン引きやシンジケートと組んで行う街娼やエスコートガールなどの場合を除き、店舗を構える業務形態のものは各地方行政の管轄にある。それらは店内で性行為を行うものとバーファイン（連れ出し料）を払って店外で性行為を行うものに分けられる。行政下にある風俗店の従業員（主に顧客に接待を行う業務に携わる者、バーガール、ダンサー、ウェイトレス、マッサージ師など）は原則として半月に一度の性病検査と半年に一度 HIV 検査を受けて行政から就労許可証を得なければ働くことが出来ない。JKTV もその例外になく、顧客を接待する Customer Care Assistant (CCA) は定期的にメディカルチェックを受けに行かなければならない¹⁰。

だが、既述のように、JKTV は日本のキャバレーやナイトバーを模しており、日本の「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」に照らし合わせれば一号営業の社交飲食店にあたる。そこでは主に顧客と談笑、飲酒、カラオケのデュエットをしたり、ステージでのダンスショーなどの接待行為を行う。従業員女性の店外への連れ出しや店内で性行為に及ぶことはほとんどの JKTV で原則として禁止されている¹¹。

ただし、実際の接客においては、顧客によって性的な接触を求められる場面が常態的にみられた。特に個室や半個室になっている VIP ルームでは、部屋の中で何が行われていると外から窺い知ることは出来ない。本論の事例で取り上げる X 店でも、ゲームの罰ゲームと称してキスをする、衣服を脱ぐ（脱がせる）、女性の乳房を揉むなどが行われ、ゲーム外でも女性性器に触る、膣に指を入れる（指入れ）、口淫、手淫などが行われていることもあった¹²。

まとめると、JKTV は行政区分上は性産業に分類されるが、マニュアルとしての業務には性的行為を含まず、接待を主とする社交飲食店である。しかし、JKTV に訪れる顧客の少なからずは CCA との性的な接触を期待しており、実際にそうした行為が行われている。

このような JKTV の CCA は、売買春をセックス中心に考えるならば実に周辺的であろう。しかしながら、彼女たちが性産業の担い手であることは疑いようもなく、こうした売買春の周辺部に注目することで「性器中心的なセックス観」[江口 2006: 144] を離れ、売買春において金銭と交換されているモノを検討することが出来る。

3-2 M 市の JKTV と X 店

次章の事例は全て M 市にある JKTV のひとつ X 店での出来事を記述したものだ。

M 市はマニラ首都圏に位置し、フィリピンのビジネス首都と呼ばれる経済の中心地で

10 X 店の場合、この検査を怠ったものは 1,000 ペソ（約 2,100 円）の罰金が科せられる。

11 81 年の鈴木元首相への抗議が行われるまでは JKTV でも連れ出し可能な店は多かったという。その後 1990 年に当時のマニラ市長アルフレッド・リムによるエルミタ・マラテ地区からの性産業一掃作戦が行われたことにより、営業形態として風俗店との線引きは明確にされるようになった。それ以前は Gest Relations Officer (GRO) と呼ばれていた接待女性が CCA という名称に変更されたのも、GRO に対する「売春婦」のイメージを退けるためであるという。

12 こうした性的行為は大眾店ほど頻度が高くなり、逆に高級店といわれる店では行われない。

ある。外資系企業のオフィスも多いが、一方で大型ショッピングモールなどの商業施設も充実し、同国の中で最も治安の良い都市のひとつとされているため、日系企業の駐在員も M 市周辺に集住する傾向にある。そのため、1970 年代以降セックス観光の中心地として多くの観光客を惹きつけてきた Ma 市の歓楽街とは異なり、M 市にある JKTV の顧客は日系企業の駐在員や現地企業で働く日本人、同国で飲食店やビジネスを営む自営業者など、中長期滞在者が大半を占める。

M 市では現在 25 店の JKTV が営業しており、約 1300 人のフィリピン人女性が CCA として働いている。小規模店で約 20 名、大規模な店では約 100 名の CCA が所属しており、マニラ首都圏のあるルソン島を中心にフィリピン全土から女性が働きに来ている。業務形態にさほど違いはなく、ほとんどの店が 90 分間のアルコール飲料を含むドリンクの飲み放題をセット料金で提供しており、別途指名料を支払うことで気に入った CCA をテーブル¹³に呼び、会話や飲酒を楽しむことが出来る。これらのセット料金と指名料は各店によって異なっており、いわゆる高級店から大衆店まで様々である。顧客男性たちは、高級店ほど見た目が美しく英語の語学力に優れている CCA が多く、大衆店はそれらに劣り年齢層が比較的高くなると評価していた。

X 店は M 市にある JKTV の中でも価格設定が最安値の店のひとつである。調査者が調査を行っていた 2018 年 6 月の時点で 18 歳から 38 歳まで 26 名の CCA が所属していた（内 1 名は一時的に休職中）。その内 12 名が子持ちで、11 名がシングルマザーである。6 名が現在大学、専門学校に通っている。30 代が 5 名、20 代後半が 5 名、20 代前半が 11 名、10 代が 5 名で平均年齢は 25.5 歳となっており、高級店と比べ若干高めの年齢層であることが予想される。

X 店は顧客男性たちの間で、「そういうこと（性的な行為）が出来る店」として有名であった¹⁴。そのため、VIP ルームに入ることは「そういうこと」を行うことが CCA の側でも少なからず予想されていた¹⁵。

CCA の給料は 15 日毎に支払われる。日給と指名料、レディースドリンクのそれぞれのバックと呼ばれる取り分からなるが、指名とレディースドリンク（LD）の獲得数をポイント換算したポイント数によってそれらの基本給は変化する¹⁶。VIP ルームで指名を得ると、指名ポイントが 2 ポイントつき、セット料金内に LD3 杯が含まれているため、自動

13 顧客が座る席のこと。X 店ではそれぞれの席にテーブル 1,2,3 と番号が振られていたが、新規客でない場合は顧客の名前で各テーブルを呼んでいた（例えば、「谷口さんの所にビール持って行って」など。新規客の場合「テーブル 1 に…」となる）。

14 調査者が日本人であることが分かったと、しばしば「日本人の女の子がこんなところにいちゃだめだよ」、「なんでこんな店に日本人（の女性）が働いてるの？危ないよ」と声をかけられた。

15 しかしながら、VIP ルームに入る全ての顧客が性的行為を求めているというわけではない。中にはカラオケの喧騒を厭う者や知り合いに会わないようオープンスペースを避けて VIP ルームを利用する顧客もみられた。

16 例えば、指名獲得ポイントが 15 以下であれば指名バックは 50 ペソ、日給は 400 ペソとなり、16 から 35 ポイントであればそれぞれ 100 ペソ、500 ペソとなる。これだけでも前者が 15 ポイント獲得した場合の 15 日分の給料は（15 日間毎日遅刻欠勤なく出勤したとして）6,750 ペソ（約 14,175 円）、後者が 16 ポイント獲得した場合だと（同様の条件で）9,100 ペソ（約 19,110 円）となり、1 ポイントで大きな違いが出てくる。

的に LD ポイントも 3 ポイント加算される。これに加え、VIP ルームではゲームの罰ゲームと称してアルコールを飲むことが多いため、オープンスペースよりも LD を獲得しやすくなっている。そのため、CCA も VIP ルームで指名を得ることに積極的な者が多い。

このことから考えると、CCA にとって性的行為を行うことは給料、ひいてはお金のためであると言えそうだが、だからといって彼女たちはお金のためなら誰にでもどんなことでも応じるというわけではない。彼女たちの顧客に対する接し方は顧客が彼女たちをどのように扱うかに応じているようであった。

4 JKTV における相互交渉

本章では、調査者が X 店で行った参与観察と CCA や顧客男性との日常的な会話をもとに、顧客男性は CCA に何を求め、また CCA はそれにどのように応じているのかを明らかにしたい。なお、以下のデータは録音機器を用いず、仕事の合間にメモを取り終業後にフィールドノートに書き起こしたものであるため、話し言葉に若干の誤りがあるところをご了承願いたい。また、インフォーマントの名前は全て仮名を用いている。日本語と英語あるいはタガログ語での会話を区別するため、日本語での発話には「」を、英語、あるいはタガログ語の場合は〈〉で表している。発話を補足する場合は〔 〕を用いて記述している。

4-1 日本人顧客にとっての JKTV

M 市にある JKTV の日本人顧客の多くは中長期滞在者であることは既に述べた。とりわけ日系企業の駐在員の場合、特に自分が望んだわけでもなく会社の都合でこの国に赴任してきた者がほとんどだ。そうした彼らからはしばしば「仕事のない日にすることがない。せいぜいゴルフと酒と女くらいだ」という声を聞いた。

次の語りは、調査者が顧客男性の沖本さんと、調査者が何のために X 店にいるのかという会話をしたときに得られたものである。沖本さんは 40 代の日系企業駐在員で、フィリピンに駐在して 3 年になるという。「何故日本人男性はゴーゴーバーよりも KTV を好むのか」という調査者の疑問に対し、沖本さんは以下のように話してくれた。

< 事例 1 >

沖本「単にセックスがしたいだけならゴーゴーバーに行けばいい。KTV は綺麗なお姉ちゃん眺めながら飲んだり馬鹿みたいにはっちゃけるのが楽しいんだよ。だから俺は〔取引先の〕お客さんに選んでもらう。「じゃあ次行きますけど、どうしたいですか？やりたいですか、それとももうちょっと飲みたいですか？」って。で、飲みたいんだったらそこにも選択肢がありますと。

「めっちゃくちゃ美人と飲みたいだけか、ちょっとブスだけどいちゃつける所がいいか、動物園だけど何でもありがたいか」つつつて。

話したり飲んだりなんて面倒くさい、さっさとやりたいってお客さんはゴーゴーバー

に連れていく。自分はそういうの好きじゃないけど。俺は疑似恋愛を楽しみたいから、やっぱKTVの方がいいな」

「動物園」というのは、X店をはじめ大衆店のことを指す。高級店と比べ、年齢層が高く容姿が「劣っている」ということと、飲んで騒いで、時に衣服を脱いでキスをしたり身体を弄り合ったりという、そこでの喧騒を合わせてそのように揶揄するのである。沖本さんに限らず、日本人顧客男性たちはX店のことを「動物園」や「怪しい店」と称していた。

一見、X店のCCAたちを愚弄しており女性の商品化を端的に表しているような発言だが、一方で彼は単に女性の身体やセックスという行為を求めているのではなく、「疑似恋愛」というプロセスを重視していることが分かる。この「疑似恋愛」というプロセスの重視は、他の顧客からも頻繁にあがった。

毛利さんは40代の独身で、和食レストランでシェフをしている。CCAたちによると、彼は**babacro**（女好き）で**paroparo**（浮気者）。複数のJKTVを毎晩飲み歩いていることで有名だという。毛利さんと志賀崎さん、ママRuby、Amy、Beth、ウェイトレスのDebraと終業後にご飯を食べに行った（アフター）。事例2は酔っ払った毛利さんが日本人ながらJKTVで働いている調査者に対し「君は本当すごいよ！勇気あるよ！」と感嘆した後の続きの会話である。

<事例2>

毛利「本当に危ないことだらけだからね、この国の夜の世界は。俺もいっぱい危ない目にあってきたし。女の子たちだって嘘つきばっかだから！（中略）今までけっこう色んなお店の女の子にアタックしてきたけど…アタックしちゃあ騙され、もう金ヅルよ金ヅル！まあもういいけどね。もう恋愛はゲームだから、ゲーム。それが楽しいんだからしょうがない」

毛利さんは飲みに出ると気前よく遊ぶため、彼を自分の顧客にしようと近づいてくるCCAも多いという。この会話に続き、彼は女性たちに対し、〈お金と愛と、どっちのほうがかつ大切なんだよー！〉と訊ねた。「どうせお金がなくなったら捨てられる。これがマニラのリアルだ！」という毛利さんに対し、女性たちは「ノー！それ違う、どっちも同じくらい大事だよ」と口々に答えていた。

毛利さんは何度も失敗を繰り返しながらもCCAとの恋愛を楽しんでいる。彼はこれまで付き合ってきた女性たちとの経験から、「〔この恋愛関係は〕ゲームなのだ」と言いながらも純粋な（あるいは真実の）愛というものを諦められずにいるかのようである。

ここではこうした「疑似恋愛」を志向する態度の有無が官能的関係性にどのように表れているのかを考えたい。次の事例3は駐在員の秋田さんとBethとのやりとりである。

<事例 3>

秋田さんは 50 代と思しき外見で、月に一度出張者の接待に X 店を利用する。毎回一緒に来るメンバーは 6 人で、それぞれが指名する CCA も決まっている。秋田さんはもちろん Beth を指名していた。彼らは来店すると毎回 VIP に入り、CCA 一人につきテキーラの大ボトルを 1 本注文する。彼らが来店すると VIP は毎回喧騒で、オープンスペースまで嬌声や叫び声が聞こえてくるほどだ。指名されている CCA の一人に聞いた話では、CCA たちの穿いている下着を賭けてジェンガなどのゲームをしているという。

クリスマスが近づいたある日、秋田さんが一人で来店した。Beth によると、彼は今月中の日本への帰任が決まったのだという。そこで Beth は秋田さんへのクリスマスプレゼントを用意し、大きなホールケーキも購入していた。さらに VIP ルームの一室にデコレーションを施し、秋田さんを迎え入れていた。VIP ルームを通りかかると、二人は手をつなぎ肩を寄せ合いながら小さな声で静かに会話していた。Beth は少し泣いているようだった。

もちろん Beth は秋田さんに対し何か見返りを期待していたわけではない。彼女は秋田さんとの別れを惜しみ、これまでの感謝を伝えたかったのだという。

秋田さんと Beth の関係性は、ロマンティック・ラブで想定されている一元的で排他的な性愛関係に基づく「恋愛」関係として捉えることはできないだろう。かといって、「不倫」や「浮気」と捉えられるような関係性とも異なっているようである。ここで重要なのは、「恋愛」と異なるものである（「疑似」）とされながらも、「疑似恋愛」関係は、「性的な関心を含む好意を抱くある特定の相手と相互交渉的な関係性を築いていくプロセス」を経るという、「恋愛」と変わらないプロセスのもとに形成されるということである。

そうでありながらも、ここでの関係性が「恋愛」関係と区別されるのは、それが「出会いが金銭を媒介にしている」関係であるからだろう。他方、それが「不倫」や「浮気」と異なるのは、疑似恋愛関係では、CCA や顧客が X 店という空間を離れた場において持つ婚姻関係や恋人関係を考慮しないからだ。

こうした JKTV における「疑似恋愛」関係を、事例 2、3 から考えてみると、この関係性は金銭を媒介としていながらも、そのことを意識した途端に「疑似恋愛」は破綻してしまうということだ。毛利さんが言うように、「疑似恋愛」関係は「これはゲームなのだ」という意図が暗に了解されたうえで行われている¹⁷。ただし、毛利さんのように、「どうせお金のためなのだ」と考えた瞬間に、この関係は文字通り「単なるゲーム」になってしまう。この関係が「疑似恋愛」であり続けるためには、Beth と秋田さんのように、「見返りのためではなく、相手に対する好意や配慮によって行為される」関係である必要があるし、また互いにそのような関係であると捉えられていなければならない。

17 これは、この関係性が非常に部分的で限定的であることによるが、この点に関しては以下で事例を踏まえてより詳細に検討する。

これに対し、事例 4 では疑似恋愛関係を含まない官能的相互行為の場面を紹介する。

<事例 4>

遠藤さんは 40 代既婚の駐在員で、赴任して 8 ヶ月になる。彼が指名していた CCA に指名が重なってしまったため、彼女が別の卓に行っている間、Rina がヘルプでつくことになった¹⁸。Rina がヘルプについている間に VIP へとテキーラのショットが 3 杯運ばれていった。待機場所に戻ってきた Rina に〈LD3 杯も貰えてラッキーだったね〉と声をかけると、以下のように状況を説明してくれた。

Rina 「あの人ね、ほんとにスケベ。私の dede (おっぱい) おっきいでしょ？」

〔胸を触ろうとするジェスチャー〕これ、だめでしょ？私のお客さんじゃない」

調査者「うん、だめね」

Rina 〈でしょ？だから、ね〔言ったの〕。「あなたドリンク頼む、そしたらね、触っていいよ」って〉

調査者が「3 杯も？」と訊ねると、しーっと内緒話のジェスチャーをして「これこれ」と自分の乳首を指さし、「ボディショットね」¹⁹と笑った。

遠藤さんは別の CCA の顧客であって、Rina は彼の顔を見たことはあっても同じ卓につくのは初めてであったという。Rina に遠藤さんを恋人として接待する必要はないし、彼も関心を示しているのは Rina ではなく彼女の「おっぱい」であった。この事例では、Rina は身体をモノ化しようとする欲望のまなざしにうまく対処し、逆に顧客を「金ヅル」としてモノ化しているといえるだろう。

この他にも、ヘルプでついた際の顧客からの性的な接触には、ほとんどの場合で拒絶が示される。

<事例 5>

調査者の帰国日が近づいていたある日、Ai と Linka が喫煙室でお喋りをしていたのでそこに交じる。調査者が帰国後は当分戻って来れないことを伝えると、Ai が〈じゃあ、お店のお客さん減っちゃうね〉と冗談を言うてくる。

調査者〈〔Ai に対し〕私のお客さん何人かはあなたを指名すると思うよ〉

Ai 〈誰！？私、畑中さんは絶対に嫌！だって前にあなたがいなかったとき〔一時帰国していたとき〕もこんなふうに〔Linka をがしっと掴んで羽交い絞めにする〕してきただから！顔を爪で引っ掻かれたのよ！〉

これに対し Linka は〈私は伊藤さんが嫌だ〉と 3 回念を押すように繰り返した。

18 ヘルプとは、指名した CCA が別の指名客の卓に行っている間に他の CCA が代わりに接待としてつくこと、あるいはその代わりに接待をする CCA のことを指す。

19 ボディショットとは、女性の胸元にレモン果汁と塩を塗っておき、顧客がテキーラのショットを一気飲みした後、そこを舐めるという行為のことを指す。

Linka〈彼は本当に *Malibog*（スケベ）！昨日も私はヘルプなのに、それでも触ってくるから怒ったの！「私に触らないで！」ってね。そうしたら触ってこなくなったわ〉

個々の顧客は名前や愛称で把握されているが、*paroparo* な顧客やいつも指名しない顧客を除いては「〇〇のお客さんの ×× さん」というように覚えられる。その上で、CCA たちは自分の顧客でない場合には、顧客からの官能的行為の働きかけを明確に拒絶することが出来る²⁰。

事例3と事例4、5との違いは、前者では秋田さんにとって Beth は替えの利かない「誰か」としてあるのに対し、後者ではヘルプとしてついた CCA たちは、誰かの不在を補うためにそこにあり、時にモノ化のまなざしに晒されているということだ。つまり、「疑似恋愛」を行うことは CCA と顧客との間に「顔」のみえる関係性を築くことであり、それを志向するか否かによって官能的行為が持つ意味も変化すると考えられる。

4-2 CCA にとっての JKTV

顧客からの官能的行為と「疑似恋愛」の働きかけに CCA たちはどのように応じているのだろうか。

CCA の顧客に対してとるべき接待の基本的な姿勢は、ある日の開店前のミーティングにおけるママ Ruby の注意に表れている。

ママ Ruby 〈OK, girls. お願いします。お客さんはあなたたちの友達じゃないの。彼らはあなたたちの *Jowa*（恋人）なのよ。ただフレンドリーに接していればいいわけじゃないからね。何か嫌なことがあったからって、ふてくされた顔でお客さんの前に行ってはダメ。あなたが *Jowa* といるときのように振る舞いなさい〉

107

新規の顧客が来店すると、指名する CCA を選ぶために Show UP が行われる。ママから Show UP の声がかかると、CCA たちは立ち上がってポーズをとり、顧客に笑顔を向ける。顧客が気に入った女性を指名すると、彼女は顧客のテーブルに同席し、会話や飲酒、カラオケのデュエットをしながら接待する。

JKTV における接待とは、単に顧客をケアすることだけでなく、恋人同士のような親密感で顧客を歓待することが求められる。CCA は指名を受けたそのときから、自分を選んでくれた相手に好意を示す必要があるのだ。言い換えれば、まず CCA の側から顧客に対し「親密な関係性を演じる」という働きかけが行われるのである。

<事例6>

沖本さんが友人を二人連れて来店したときのことであった。友人二人は初めての来

20 ただし、CCA 同士の関係性や事例4のように LD やチップが望める場合など、拒絶できない、あるいはしない状況もある。

店である。いつものようにVIPに入っていき、テキーラの小ボトルが注文された。CCAはAi、Momo、Bethが指名された。Bethによると、全員で乾杯からテキーラをショットで2杯一気に飲みした。そこから「山手線ゲーム」を始めたという²¹。ゲームの罰ゲームは1枚服を脱ぐかテキーラを1ショット。何度かやっていくうちに「王様ゲーム」をすることになったが、その命令はほとんどディープキスカボディショットであったという。

3セット計4時間半も滞在していたため、調査者がVIPのトイレ掃除をしようとBethたちのいる個室の前を通りがかった時には、顧客もCCAたちもすっかり酔ってしまっていた。

Bethは、自分を指名していた顧客が、彼女が酔っ払ってうとうとしてしまっている間に他の女の子にキスしたり膣内に指を入れたりしていたことに我慢ならなかったという。怒ったBethはその子を触ろうとする顧客の手を叩き、彼の上に馬乗りになってディープキスをする、〈あなたはわたしのゲストでしょ！〉とくぎを刺したという。

Bethは、〈あの子がいいなら私じゃなくてあの子を指名すればいいじゃない！〉とも言っていた。ここでのBethは顧客にやきもちを焼いているかのようである。

Jamieもこのような官能的相互行為における疑似恋愛の態度を示している。

＜事例7＞

11月も終わるかという頃、4人組の団体客が来店した。1人が駐在員で、トモさんという。他の3人はトモさんの会社の後輩で、今回は日本から観光で来ているという。観光で来た3人は英語がほとんど出来ない。

テキーラの小ボトルが注文されると、CCAたちは大喜びになった。顧客側はすでに飲んで来ているようで、ドリンクが運ばれてくる前からおっぱいを触ろうとしたり、キスをしようとしていたりしていた。Naomiは触られてもあまり気にせず、JamieとDivineは逆に顧客に抱きついたり手を握ってかわしている。キスはみんな少し拒んでいた。

テキーラと顧客のビールが運ばれてくると、乾杯をして早速「王様ゲーム」が始まる。王様命令でディープキスや互いに乳首を吸い合うといった命令が下されると、女性たちは〈何それ！（*Ano ba iyang!*）〉と文句を言いつつも命令をうけいれていた。何回目かの命令で、Jamieが自分を指名したカズさんではなく、トモさんとディープキスすることになった。Jamieは最初〈No！No！！〉と言っていたが、渋々命令を受け入れた。Jamieとトモさんがキスしているのを確認し、その回の王様だったユースケさんが「はいOK！」と言うと、Jamieはすぐさまカズさんに抱きつき、キ

21 日本人顧客が教えるため、VIPによく入るCCAは「山手線ゲーム」、「たけのこたけのこによっきき」、「王様ゲーム」、「じゃんけん」などのゲームをよく知っている。

スをした。

Jamie の行為は、自分を指名してくれた顧客以外との接触を、自分の顧客であるカズさんとの接触で上書きするかのようである。また同時に、他の顧客とのキスは嫌がってもあなたとのキスは喜んでするとカズさんに示しているかのようだ。この事例では、Divine も Naomi を指名しているにも関わらず自分のおっぱいに触ろうとしてくるユースケさんに対し〈あなたは私のパートナーじゃないでしょ！〉と拒否していた。

このように、CCA は自分を指名してくれた顧客なのかそれ以外の顧客なのかを非常に重視する。そして「私のお客さん (My Guest、My Partner)」であれば自分の *Jowa* であるかのように振る舞うのである。

ただし、たとえ自分を指名してくれた顧客であっても、そのように *Jowa* として振る舞わない場合もある。それは、*Paroparo* な顧客と無理強いしてくる顧客だ。続けて二つの事例を紹介しよう。

<事例 8>

タケシさんは 40 代で、日本食の飲食店を経営している。半生以上をフィリピンで暮らしているため、タガログ語も流暢に話することが出来る。昔から飲み歩くのが好きで、複数の店に通っているため、彼のことは M 市にある JKTV の CCA たちの間でよく知れ渡っている。

タケシさんは X 店に来ると、その時目についた CCA を指名するので、同じ子を指名することが続く場合もあれば、毎回別の子になることもある。VIP には入らず、いつもオープンスペースなのだが、おっぱいに触れたりキスをしようとしてくる。

その日は Faye が指名された。Faye は人気が高く、10 年近く JKTV で働いているため、顧客のあしらいも上手い。タケシさんが触ろうとしてきても、「ダメでしょ！」と言って彼の手をとり、自分からマッサージをすることでタケシさんが勝手に手を動かさないようにしていた。

接客中はそうやって上手くかわせていたのだが、タケシさんが帰り際に頬にキスを強いるふりをして Faye の唇にキスをして帰っていった。入口の扉が閉まると、Faye は使っていないおしぼりを取りに行き、顔を顰めて唇を拭いた。それ以来、タケシさんが来店し Faye に笑顔で呼びかけても、彼女は彼を一瞥するだけで無視するようになってしまった。

<事例 9>

Alyssa は X 店の CCA には珍しく、たとえ指名客であっても性的な接触や唇へのキスを一切拒否していた。彼女は 20 代後半であったが、身長が低くぱっちりとした大きな目の童顔で、日本語も話せるため顧客からの人気も高い。

2 月初めの忙しい日、韓国人の 2 人組が来店した。彼らは Alyssa と Happy を指名して VIP へ入っていった。今日は二組目の韓国人の顧客だった。

しばらくすると、いつの間にか Alyssa が待機場所に戻ってきていた。

調査者「あれ？お客さん帰った？」

Alyssa「まだ。今 Barbie いるから、〔私は〕休憩。ママには内緒ね」

調査者「え？チェンジ？²²」

Alyssa「違う違う。コリアン、*Malibog* でしょ？²³ お客さん *Soksok* (セックス) したい。でも、私ダメでしょ？〔そういった行為が〕好きじゃないから。でもお客さん *Soksok* したかった。だからお客さんに *Malibog* な子紹介するよって言って、Barbie を呼んだのよ。Barbie は一番 *Malibog* でしょ？お客さん私もリクエストでいいって〔言ったけど〕、今〔2人は性的な行為を〕してるでしょ？だから逃げてきたんだよ」

事例8のタケシさんは *Paroparo* で、かつ彼からの性的接触を拒否する Faye に無理矢理キスをしている。事例9の韓国人顧客も、性的接触を嫌う Alyssa に執拗に性行為を求めたことがうかがえる。これらの事例では、Faye も Alyssa も彼らを「私のお客さん」として扱うことを放棄している。ここにはもはや「疑似恋愛」はみられない。

Paroparo な顧客は容易に他の CCA に目移りしてしまうため、「自分だけの」顧客と捉えることに困難がある。このことは彼を *Jowa* として扱うことを難しくする。他方、無理強いをしてくる顧客の場合、CCA は時に身の危険を感じるようになる。

熊田陽子は日本の SM デリバリーヘルス店の事例において、「おんなのこ」は顧客に対しプレイへの積極的な参加と彼に対する応答を通じて、顧客とともに自分もそのプレイを楽しんでいると示すことで、そこでのプレイを「遊び」として成立させていることを示している〔熊田 2017: 50-73〕。しかし、「これは遊びだ」というメッセージが顧客から確認できない場合、つまり彼女の身体への配慮が欠如していたり自分勝手に振る舞ったりする場合には、「おんなのこ」は身の危険を感じ、プレイに没頭出来なくなってしまうことで、もはや「遊び」は破綻してしまう〔熊田 2017: 69-71〕。

X店における「疑似恋愛」をプレイとして捉えようと、事例9では、Alyssa は韓国人顧客から「これは遊びだ」というメッセージを確認できず、プレイから降りてしまったといえるだろう。

以上のように、「疑似恋愛」の働きかけはむしろ CCA の側からも行われること、しか

22 顧客が指名した CCA を気に入らず、他の子を指名しなおすこと。滅多にないが、例えば VIP で性的接触を求めてくる顧客に CCA が抵抗した場合などにはチェンジになることがある。Alyssa の場合は自らチェンジを申し出たが、顧客は Barbie を追加で指名したという。

23 フィリピンにある韓国系 KTV では店内で性行為あるいは射精を促すサービスを提供しており、JKTV もそれらの行為が可能だと期待してやってくる韓国人客が多い。そのため、CCA たちの間では「KTV に来るコリアンは *Malibog*」という声があがったが、彼女たちは韓国人全員がそうであると言っているわけではなく、むしろプライベートで外国人と交際している CCA の多くは、日本人よりも韓国人を好む傾向にあった。これは、現在韓国からフィリピンへの語学留学が増加していることで、フィリピンで働く比較的若い世代の在比韓国人が増えていることが一因として考えられる。彼らの多くは湾岸部の高級ホテルやカジノで働いており、CCA たちと同世代の独身で羽振りのいいのである。また、近年フィリピンでも他の東南アジア社会と変わらず、K-pop の流行が生じている。これにより十代から二十代の若い世代では、韓国人男性のような容姿を好む女性も少なくない状況にある。

し、「疑似恋愛」を行うためには顧客が「私のお客さん」として捉えられること、顧客からの CCA に対する配慮が示されることが必要であると考えられる。

この点を Sunny は、〈仕事で一番大切なのは Respect（尊重）でしょ？〉と、端的に言い表している。この言葉は顧客との関係性についてではなく、〈何故以前働いていたお店を辞めて X 店に来たのか〉という調査者の質問に対する、Sunny の以下の返答に基づいているのだが、CCA と顧客との関係性を考えるうえでも重要な言葉であるため紹介したい。

Sunny 〈前のお店キャプテンとお店を休んだことをめぐって口論になったから辞めたの。息子が病気になったから友人と休みを代わってもらったのに、お客さんとのデートだろうって疑ってきたのよ。私たちに対する Respect がないような人とは一緒に働けないわ〉

これに続けて彼女は、〈仕事で一番大切なのは Respect でしょ？ (*Respect is the most important para sa trabaho, diba?*)〉と言っている。

Sunny が前のお店を辞めるきっかけとなったのは、当時のキャプテンが彼女に対し Respect を示さなかったからであるが、ここでの Respect の欠如とは、彼が「Sunny は嘘をついている」と彼女を信用しなかったこと、また、「彼女の息子が病気である」ということに対する心配や配慮を見せなかったことであると考えられる。

「私たちに対する Respect がない」という言葉には、「CCA だから、嘘をついて仕事を休み、顧客と遊んでいる」といったキャプテンが持つ CCA に対するステレオタイプな見方に対する批判が含まれているように思う。またこれに関し、想像の範疇ではあるが、Sunny にとって、自分をそうしたステレオタイプに当てはめられたことが、キャプテンからの「彼女自身」に対する思いやりや理解の不足、つまりは Respect の欠如だと感じたのではないだろうか。

〈仕事にとって〉という彼女の言葉から、Respect の重要性は従業員同士だけでなく、彼女たちと顧客との関係性についてもいえるだろう。つまり、「CCA」と「私のお客さん」との関係においても、尊重、敬意、あるいは注意、関心、顧慮といった気持ちを互いに持って接することが最も重要だと考えられる。そして、この Respect とは、それを向ける相手がある特定の「誰か」として把握したうえでなされるものであり、この点にこそ疑似恋愛と Respect とのつながりがみえてくる。X 店における Respect のない関係性とは、CCA にとって、顧客を「私のお客さん」と捉えられないような関係であり、事例 4、5 や 8、9 のような状況であると考えられる。

以上のように、本節 4-1 では顧客男性による働きかけを中心とし、続く 4-2 では CCA からの働きかけを中心とする疑似恋愛関係やそれが成立しない関係性の事例を検討してきた。

これらの事例から、大きくまとめて以下の 4 点が明らかとなった。第一に、「疑似恋愛」関係が「恋愛」と区別されるのは、それが「出会いが金銭を媒介としている」からである。しかし、この関係性が金銭を媒介としていることが意識された瞬間に、疑似恋愛関係は破

綻してしまう。第二に、そうした疑似恋愛関係は、恋愛関係と同様に「性的な関心を含む好意を抱くある特定の相手と相互交渉的な関係性を築いていくプロセス」を経る必要があり、「顔」のみえる関係性が形成される必要があることである。それは身体の一部への関心であってはならないし、「誰か」の不在を補う存在であっても成立しない。このことと関連して、第三に、CCA にとって、その特定の「誰か」が「私のお客さん」として捉えられている必要があった。「疑似恋愛関係」が成立するためには、単に固有名をもった「誰か」として把握されるのではなく、「私にとっての誰」であるかが重要だといえる。そして第四に、顧客が CCA にとって「私のお客さん」と捉えられるためには、顧客の側からの自分が指名する CCA に対する尊重や関心、配慮といった Respect が示されることが求められている。

5 お金が媒介する親密性

5-1 「私のお客さん」との関係性と「友人」、「恋人」との関係性

ここまでみてきた事例からいえることは、顧客が CCA をどう扱うかによって CCA からの働きかけや態度、サービスの内容は変わるということである。より広義に言えば、X 店のようにセックスや男性客への射精を促す行為をマニュアルとしてのサービス内容に含まない、売買春やセックスワークのグレーゾーンにおいては、サービス提供者と顧客の関係ごとにサービスの内容が変化するということだ。

ここにおいて重要なのは、「疑似恋愛」、つまり「性的な関心を含む好意を抱くある特定の相手（CCA）と相互交渉的な関係性を築いていくプロセス」であった。4-2 のママ Ruby の言葉にあるように、CCA たちは自分の顧客全てを *Jowa* として扱わなければならない、事例 6、7 の Beth や Jamie のように、出会ってすぐの新規顧客でも彼を愛してやまないかのように振る舞うことが必要となる。

しかしながら、それは「CCA たちの愛情表現は全て演技である」ということを意味するのではない。事例 3 の Beth と秋田さんのように、「疑似恋愛」はサービス提供者と顧客が互いに配慮し合う「顔」のみえる関係性を築いていくプロセスでもありうる。

例えば、調査者の帰国日が近づき、X 店で働く日数もあと少しとなった頃、20 代後半の CCA の Mae から「どのお客さんが一番好きだったの？」と聞かれたことがある。

<事例 10>

Mae 「〇〇〔調査者の源氏名〕はどのお客さんが一番好きだったの？」

調査者 「ええ、誰かな？ええ〜…〔言い淀む〕」

Mae 「難しいかな？でもね、私たちも誰が好きとかあるよ。このお客さんは大変だなーとか、このお客さんはいつも LD たくさんくれるし、優しいとか。全然違うよ。私もね、前はすごい好きなお客さんがいたの²⁴。彼は結婚してたから、付き合

24 Mae は 1 年半ほど CCA の仕事を休んでいた。

いたいとかじゃないけど、私のこといつも助けてくれたよ。今〔一番好きな人〕はねー、まだ戻ったばっかだから、どうかな？」

ここでは、CCA にとって顧客との関係性は、それぞれの顧客に対する好意とともに語られる。彼女の言う、一番好きだった相手の「いつも助けてくれた」という点は、単に金払いがいいとか、優しいとかではなく、彼女が困っていることに手を差し伸べてくれたということであり、彼女を配慮してくれていた相手であったということだろう。

ただし、事例には以下のような続きがある。

調査者「今のお客さんかー。南山さんとかはどうなの？」

Mae「あー、彼も良い人だけど、彼は友達だから」

南山さんは、50代の自営業者で、80年代からフィリピンでビジネスをしており、タガログ語も流暢に話すことが出来る。彼は Mae が仕事を休む以前から Mae を指名しており、彼女が休んでいる間も度々連絡を取り一緒に出掛けていたという。Mae は、休んでいる間自分がどこにいて何をしているのかを、自分を指名していた顧客に対しても、X店の一部の仲の良かった CCA を除く他の CCA にも話していなかったという。休暇中にくる顧客からのメールに対しては、話を濁したり時には嘘をついたりしていたそう。彼女は、「顧客」や店の関係者に対しては隠していた X 店を離れた自らのプライベートを、南山さんには明かしていたのである。

Mae が復帰すると、南山さんは再び Mae を指名するようになった。だが、彼女にとって南山さんはもはや「私のお客さん」ではなく、サービス提供者と顧客を超えた「友達」として捉えられている²⁵。

このような「サービス提供者」と「顧客」という役割を超えた関係性は、「恋人」関係にもみられる。

<事例 11>

調査者が1ヵ月の一時帰国から戻りお店に復帰すると、Gwen から日本人の「彼氏」が出来たと報告を受けた。それから数日後のある日、Gwen の「彼氏」であるという橋本さんが来店した。

閉店時間になっても VIP ルームから出てこない二人に訝しく思っていると、ママ

25 このような「顧客」と「友人」の区別は、北条かやが紹介している日本のあるキャバクラ店の店長による「友達営業」の説明が示唆的である〔北条 2014〕。これによると、「友達営業」とは、『「友達っぽい営業」じゃなくて、ほんとに『友達』にならないといけないから。それこそ、友達なら自分にメリットのないこととかにも常に付き合わないといけないでしょ。それお客さんにできるかって言ったら、やっぱり難しい。極端な話、友達って、自分の家とか知ってる人多いじゃん。じゃあお客さんに簡単に、家を教えられるかっていうと、そうじゃないでしょ。だから、友達営業の方が恋愛営業より、はるかに難しい』〔北条 2014:156、原文のまま〕。

Mila は〈あの二人口論してるみたい〉と言う。さらに〈彼すごくスケベだから！〉と言うので、調査者は橋本さんがVIPでセックスに及ぼうとしたのかと思い、〈彼そんなに酔ってるの？〉と周りのCCAに訊ねると、Happyは〈違うよ〉と言う。

二人がやっと出てきたとき、Gwenがあまりにも暗い顔をしているようであったので、調査者が〈どうしたの？大丈夫？〉と声をかけると、Gwenは我慢ならないといった風に一気に説明した。

Gwen 〈彼はいつもたくさんの「お店」に行くの。私、本当に妬ましい！〉

調査者 〈あー、なるほど。彼はあなたの顧客（Customer）じゃなくて、恋人（lover）だもんね〉

Gwen 〈そうよ。私は決して彼を顧客（Customer）だなんて思ったことない。あなたもわかるでしょ？私が他の私のお客さん（My Guest）の前と彼の前とじゃ全く別の顔になっちゃうこと。（他のゲストの前では）単に楽しむことなんて出来ない。ママもみんなも私たちの関係について知っているわ。（…）私、本当に妬ましいんだけど…しょうがない、〔こんなにも嫉妬を感じてしまうのは〕私が女の子だからだわ〉

Gwen 〈こんなふうに日本人と〔恋人という〕関係になるのは初めてのことなの。日本人はみんなこういうことをする〔いろんなお店に行くこと？〕でしょ？だからいいの…〉

二人が口論になったのは、嫉妬で笑えなくなったGwenに対し、橋本さんがチップを渡すことで機嫌を取ろうとしたからだという。チップを嫌がったGwenに橋本さんは金額が気に入らないのだと勘違いし、再び金額を増やして渡してきた。彼女は「恋人」であるにも関わらず、彼がお金で解決しようとしてきたことが嫌だったのだという。

その後もGwenは橋本さんがX店の別のCCAに話しかけただけで嫉妬し、他の顧客に指名されていても橋本さんからの連絡を気につけ、彼と他の顧客とで指名が重なると、他の顧客という姿を彼に見られることにも、彼に他のCCAがヘルプでつくことにも気が気でないようであった。ママMilaはそうしたGwenに対し、〈恋に落ちて、周りが見えなくなっちゃってる〉と溜息をついていた。

Gwenと橋本さんはX店で初めて出会った。それでも彼女は〈彼を顧客だと思ったことは一度もない〉と言い、周りのCCAが呆れるほどの嫉妬心や執着心を彼に対して示すのである。これは事例6のBethが示した嫉妬とは異なるものだろう。Bethは明確に〈あなたは私のゲストでしょ！〉と述べており、そこで示されているのは「CCA（サービス提供者）」の「私のお客さん（顧客）」に対する執着心である。他方、Gwenが示す嫉妬は「サービス提供者」と「顧客」との間に想定される権力関係や「サービス提供者」が「顧客」に対してとるべきと考えられている態度を放棄し、橋本さんに対する感情のままに行っている。

これらの「友人」関係や「恋人」関係が「サービス提供者」と「顧客」の関係から区別して語られていることは興味深い。だが、このことから、前者こそ本来の親密な関係性であり、後者は結局「役割」の範疇を出ない、演じられた（あるいは偽りの）親密性にすぎ

ないと結論づけてしまっているのだろうか。

5-2 「役割」に基づく親密性

X店における親密性は、「CCA」であるフィリピン人女性と「私のお客さん」である日本人男性という「役割」のもとで形成されている。それが親密な関係性でありながらも、文脈を限定する関係性であることは、前節における友人や恋人との区別に加え、CCAたちが言う〈仕事は仕事でしょ〉という言葉に表れている。

<事例 12>

2月半ばのある日、Rinaと仕事終わりに一緒に帰宅中、彼女はBarbieが「(X店以外の)別の場所で稼いでいる(=お店の外で売春をしている)」ことについて噂話を始めた。これについて調査者が〈Rinaもそういうことしたことあるの?〉と訊ねると、Rinaは以下のように答えた。

Rina 〈ないない。*Paroparo*で*Soksok*していると病気になっちゃうよ。他のそういうことをしている子からお客さん、お客さんから自分にうつっちゃうのよ。(…)私はBarbieが入ってきたときから彼女はそういう〔売春をする〕子だと思ってた。彼女は他の場所でお金を稼いでいるから、〔仕事を無断欠勤してばかりなのに〕あんなにお金を持っているのよ。〉

調査者 〈じゃあRinaはお店のお客さんとも*Soksok*したことないの?〉

Rina 〈お客さんとはないよ。Boyfriendになったお客さんならいるけど。Boyfriendならお客さんだった人でも*Soksok*してもいい〉

調査者 〈Boyfriendじゃないお客さんはダメ?〉

Rina 〈ダメ。お店でゲストが*dede*(おっぱい)を「ちゅぱちゅぱ」してきたり*pepe*(女性器)を触ってくるのはいい。だって仕事だから。仕事は仕事でしょ?でもお店の外で*Soksok*はダメ〉

Rinaは事例4でもみたように、自分の大きなおっぱいを武器に顧客からLDを得ることも厭わない。しかし、顧客とのそうした性的行為を受け入れられるのは、それが「仕事」であるからだ。仕事を離れた店外においてそういった行為を認められるのは、「Boyfriend」だけなのである。

また、JKTVでの関係性を超えた友人関係を求める志賀崎さんについて、Divineがうんざりしながら不平、不満を語ったことがあった。

<事例 13>

志賀崎さんは40代で日本とフィリピン間の仲卸業に就いている。彼は周囲の人間から見て明らかにDivineに好意を持っているにも関わらず、彼女のことを指名せず、いつもフリーでいる。Divineに指名がなければフリーでも彼女と話すことは出来るのだが、その日はDivineがずっと誰かしらに指名されていたため、志賀崎さんは飲み

すぎて酔っ払い、「もうこんな店来ねえよ！」と暴言を吐いて帰っていった。

Divine 〈彼はいつもそう。酔っ払うとあんなふうに周りに失礼になる。前、中華料理屋に〔調査者含め3人で〕行ったときもそうだったでしょ？タクシーの運転手に対し怒っていた。私はドライバーが怒らないように〔志賀崎さんに〕秘密でタガログ語で彼に話しかけていたの。「*Kuya*²⁶、ごめんなさい。彼の言うことは聞かないでください。落ち着いて、ごめんなさい」って。(…)たぶん私がいなければ *Kuya* は志賀崎さんにパンチしてたと思う。私も志賀崎さんがゲストではなく〔志賀崎さんが言うように〕単なる友人なら、彼を殴ってやるのに〉

志賀崎さんと Divine の「友人」と「顧客」をめぐる問題は、長く尾を引くこととなった。別の日にも志賀崎さんは他の顧客に指名されている Divine を見て機嫌を損ね、酔っ払ってママ Ruby と Debora に当たっていた。これに関し、Divine と仲の良い Mae は以下のように語っている。

<事例 14>

Mae 「志賀崎さんはいつも文句ばかりだよ。しかもママ Ruby や Debora ばかりに言うでしょ。でもそんなの〔Divine と話せないことは〕しょうがないじゃん。自分が指名しないんだから。いてほしいなら指名すればいいのに、でしょ？単なるお客さんなのに〔Divine に指名が入っていたから〕ジェラシーね。多分〔彼は Divine のことを〕恋人みたいに思ってるよ。お客さんみんなそんな人多いよ」

調査者 〈彼は友人じゃなくて、「お客さん」なだけなのにね〉

Divine、Mae 〈そうそう〉

志賀崎さんは「顧客」である限り、酔っ払って横柄な態度をとっても「仕方ないね」で許される。しかし、「顧客」であることを超えて JKTV での関係性外な関係を CCA に対して求めたとき、彼は勘違いした迷惑な存在として受け取られるのだ。さらに、ここで Mae がいう「単なるお客さん」とは、志賀崎さんが Divine を指名しないということから「私のお客さん」ではなく、文字通り単に X 店の顧客のひとりであるということを指していると思われる。彼は単なるお店の一顧客にすぎないにも関わらず、Divine を（「CCA」と「私のお客さん」の役割を超えた）「恋人」として捉えていると批判されているのである。Mae の「お客さんみんなそんな人多いよ」という言葉は、同様に「役割」を超えた「恋人」として CCA をみている顧客が多いという指摘であろう。

これらの「仕事は仕事」という態度や、「顧客」であれば許容する（あるいは我慢出来る）という姿勢は、「CCA」と「私のお客さん」との関係性をごく狭い文脈に限定しているとも捉えられる。

26 タガログ語で「お兄さん」の意。自分よりも年上の男性に対して用いる敬称。

浅野智彦によれば、ある関係性における親密さについての従来の見方は、「本当の自分」をどれだけ相手に見せられるか、その度合いによって「深いー浅い」が測られてきた〔浅野 1999〕。つまり、ここでの親密性は、自分を全人格的に曝け出しえて、他方、相手のことを全人格的に把握しうるような関係性において、より「深く」親しい間柄として考えられていた。

しかし、そのような関係性の「深さ」は、主に家族や夫婦、恋人といった生活の多様な側面で文脈をともにする包括的な関係性においてのみ、親密な関係性が形成されうると考えられてきたことによって、その自明性を担保してきた〔浅野 1999: 49-50〕。このような関係から離れて生きることは非常に困難であったため、そうした関係性の内部において、人びとは「各人がどのような人間であるのか、自分にも他人にもはつきりとわかるような一貫した同一性を持つこと」が強く要求された〔浅野 1999: 49-50〕。それゆえに「深さ」の図式があたかも自然なものであるかのような信憑性を持ちえたのであるという。

そして、今やこの「包括的コミットメント」と呼ぶべき親密性において、その包括性は流動化と柔軟化が進む現代社会の中で少しずつ解体しつつある。つまり、「包括的コミットメント」から、「参入・離脱の比較的容易な関係において、生活の文脈を限定的、選択的のみに共有するような親密性」としての「選択的コミットメント」へとシフトしつつあるのだ〔浅野 1999: 49-50〕。

前節の事例 10、11 における「友人」、「恋人」としての関係性のみを「親密な関係性」とするとみなすことは、浅野の言う「包括的コミットメント」に基づく捉え方だといえるだろう。他方、そうした見方からすれば、「浅い」関係性のようにみえる CCA と「私のお客さん」との関係性においても、各々の生活の文脈における一部分を共有する「選択的コミットメント」に基づく「親密な関係性」が生じていると考えることが出来ないだろうか。

事例 3 の Beth と秋田さんや、事例 10 の Mae と「一番好きだったお客さん」との関係性は、「サービス提供者」と「顧客」という役割のもとでの関係性を超えるものではないかもしれない。しかしながら、互いを代替不可能な存在として捉え、互いに対する Respect をもって接する関係性には、「具体的で身体性を持ち、人称性を持つ他者との間の『間人格的』な関係性のなかで、その他者の生命や身体への配慮やケアをメディアとして繋ぎとめられるもの」〔斎藤 2000: 92-93〕としての親密性が形成されていることは明らかであろう。JKTV での CCA と顧客の関係性においては、互いに対する尊重や配慮を示すことが、両者の間に「顔」のみえる関係性を形成し、互いを代替不可能で比較不可能な「誰か」として把握し合う、「親密な関係」を築く起点となっているのである。

6 おわりに

本論ではこれまで、JKTV における「サービス提供者」としてのフィリピン人女性と「顧客」としての日本人男性の関係性に焦点を当てることで、賃金労働を契機として生じる親密性、あるいは金銭を媒介とする交換関係における親密性について検討してきた。

では、X店で顧客によって支払われた金銭と引き換えに提供されている「モノ」とは何であったのだろうか。

本論では、それを「顧客という役割」をえることであり、それによってえる「交渉の資格」であると結論づけたい。これはより詳細に言えば、この「顧客という役割」をえることによって、性的サービスを含む「疑似恋愛」に関わるサービスを受けられるような交渉が可能となる資格をえることである。

本来ならば、フィリピン人 CCA と日本人顧客男性が出会い、関係を築いていく可能性は限りなく低い。彼女たちと彼らは、生まれも育ちも国籍も文化も共有しない文脈の交わらない存在であるからだ。それにも関わらず、両者が出会い、限定的とはいえ親密な関係性を形成し得るのは、彼女が「サービス提供者」として働いており、彼が「顧客」として来店したからである。この意味で、X店における関係性はまさに「賃金労働、あるいはお金の交換によって生じる関係性」であるといえる。

また、X店で CCA からどんなサービスが受けられるのか、またそれらのサービスはどういった意味を持つのかという点は、それぞれの関係性によって多様であった。各関係性におけるサービスの差異は、顧客が CCA をどのように扱い、また CCA が顧客に対しどのように応じ働きかけているかという相互行為のなかで生じていた。そこでは、日本人男性が「顧客」という「役割」をえて CCA を指名することで「私のお客さん」となることで初めて、CCA からの「疑似恋愛」の働きかけを受けて関係を形成しはじめることができ、またその「疑似恋愛」のなかでどんなサービスが提供されるのかを交渉することが可能となる。したがって、ここで金銭と交換されているモノは、具体的な商品やサービスではないのである。

つまり、「顧客」が支払う金銭は、共通性にも共有性にも乏しいフィリピン人 CCA と日本人顧客男性の間の、これまで交わったことのない文脈を不問とし、その不在を代替するモノとして働いている。そしてこうした文脈の不在の代替が、CCA との間にいかなる関係性を築いていくのか（どんなサービスを得られるのか）を彼女とともに構築していくプロセスに彼が参与する資格を保証するのだ。

他方、この金銭による代替性は、そのことにより CCA と顧客の関係性を「サービス提供者」と「顧客」という「役割」に限定する。「仕事は仕事」、「顧客であるから許容する」という態度は、彼が「顧客」であるという文脈を金銭によってえた関係性においてのみ可能なものであり、「顧客」でない彼は CCA にとって文脈を共有しない、立場が不明瞭で把握困難な存在でしかない。もしも顧客が「サービス提供者」と「顧客」という役割を超えた関係性を望むのならば、「彼を私の顧客として捉えたことは一度もない」という Gwen と橋本さんの場合（事例 11）や、Mae が「CCA」という役割を降りている間も関係を繋いできた彼女と南山さんの場合（事例 10）のように、異なる役割が予め用意されているか、共有されうる文脈を「X店」という場の外で新たに築いていく必要があると考えられる。

以上のような金銭を介した関係性とそこでの親密性、そしてそこで交換されるモノに関する考察は、お金を交換の手段として用いることによる社会的紐帯の破壊を危惧する見方

に対し、そうした現代の資本主義社会における負の側面がある一方で、「お金」が介入することによってのみ成立する親密な関係性があることを示そうとする試みであった。

本論における文脈限定的な親密性が、個々人の生き方、あるいは生のなかでどのように位置づけられるのか、あるいはいかなる意味を持ちうるのかという点を、今後の課題として検討していきたい²⁷。

<謝辞>

本研究は、公益信託澁澤民族学振興基金の「2019年度 大学院生に対する研究活動助成」を受けたものです。

<参考文献>

- 浅野智彦 1999 「親密性の新しい形へ」 富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣、pp.41-57。
- 江口聡 2006 「性的モノ化と性の倫理学」『現代社会研究』9(12):135-150。
- 江原由美子 2008 「性の商品化」 江原由美子・山田昌弘編『ジェンダーの社会学入門』岩波書店、pp.132-141。
- カステル、ロベール 2012 『社会問題の変容——賃金労働の年代記』前川真行訳、ナカニシヤ出版。
- 熊田陽子 2017 『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィ——SM・関係性・「自己」がつむぐもの』明石書店。
- 齋藤純一 2000 『公共性』岩波書店。
- ジンメル、ゲオルク 1999 『貨幣の哲学』居安正訳、白水社。
- グラント、メリッサ G. 2015 『職業は売春婦』桃井緑美子訳、青土社。
- 田中雅一 2014 「〈特集論文〉「やっとうホントの顔を見せてくれたね!」:日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』6:30-59。
- 2018 『誘惑する文化人類学——コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社。
- 北条かや 2014 『キャバ嬢の社会学』星海社新書。
- ホックシールド、A. R. 2000 『管理される心——感情が商品になるとき』石川准・室伏亜希訳、世界思想社。

Bloch, Maurice & Parry, Jonathan 1989 *Money and the Morality of Exchange*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lash, Scott 2001 Forward: Individualization in a Non-Linear Mode. In U. Beck & E. Beck-

27 また、本論の関心と紙幅の都合上、本論の事例にはフィリピン人女性と日本人男性との間の文化的差異によるコンタクトのずれが多分に含まれておりながら、この点について詳しく分析を行うことができなかった。これに関しては別稿にて改めて論じたい。

- Gernsheim eds. *Individualization*. London: Sage Publications, pp. vii-xv.
- Leigh, Carol (AKA Harlot, Scarlot) 2002 Inventing Sex Work. In Jill Nagle ed. *Whores and Other Feminists*. London: Routledge, pp. 223-231.
- Zelizer, Viviana A. 1989 The Social Meaning of Money: "special monies". *the American Journal of Sociology* 95(2): 342-77.
- 2005 *The Purchase of Intimacy*. Princeton: Princeton University Press.

**The Intimate Relationship with "My Guest":
Case Studies on Filipino Karaoke Bar Girls and their relationships between Japanese Guests in
the Philippines**

Yumeno TAGAWA

Keywords : sex industry, sex related work, wage labor, intimacy, Philippines

120

Taking the case of a Japanese karaoke bar (JKTV: Japanese Karaoke TV) in Metro Manila, which is one of the most popular sex-related industries in the region, this article examines the intimate relationship constructed through market exchange by the Filipino karaoke bar girls and their Japanese guests in the Philippines.

Previous studies demonstrated that the use of money as a means of social exchange would lead to the destruction of social bond. Recently, some sociologists objected to this idea, arguing that the use of money as a means of social exchange is not solely focused on the trade of fixed-value commodities, but it also includes the process where the value and content of the commodity/service in question are negotiated during the course of exchange, especially among the persons with intimate relationships.

However, these objections are based on the well-established concept of "intimate sphere" as opposed to "public sphere." This paper investigates the quality of relationships constructed between Filipino sex workers and their (predominantly male-Japanese) guests at one JKTV located in one of the most famous red-light districts in Metro Manila. Whether this relationship can still be regarded only as a fixed-value trade, is one of the major inquiries of this research. In such situations, expressions of intimacy do not always turn out to be 'performed' (therefore 'fake' and 'commoditized') ones. The encounter between a Filipino karaoke bar 'girl' and a Japanese 'guest' at a JKTV can spark a specific relationship from the moment the 'guest' requests his favorite girl. They can share fun, romantic and even sensual attitude that lasts within a specific time duration.

Employing the concept of “selective commitment”, this article presents case studies focusing on the communication between the host (Filipino JKTV girls) and the guest (male Japanese customer). This study suggests an alternative way in which persons forge intimate relationship with others in an era of globalization.